紹介

久保田淳編
『吉田兼右筆十三代集玉葉和歌集』

平安時代の『古今和歌集』に始まって室町時代の『新続古今和歌集』に至る二十一の勅撰和歌集、いわゆる二十一代集のうち、鎌倉時代の『新勅撰和歌集』より『新続古今和歌集』まで、和歌史における中世の根幹を成すものが十三代集である。本書はその十三代集の重要な伝本として既に定評のある、宮内庁書陵部蔵吉田（卜部）兼右（永正一三―天正元）書写二十一代集のうち十三代集を影印版で収め、解説を付して刊行する叢書全十三巻の第一回配本である。

『玉葉和歌集』は第十四番目の勅撰集で、伏見院の院宣により京極為兼が正和元年（一三一二）奏覧した。二十一代集中最も多い二八〇〇首を収める浩瀚な集であるが、また十三代集の中でも最も清新な歌風の集として、その和歌史における評価は高いものがある。

兼右本は天文十九年（一五五〇）に書写された列帖装二帖から成る本である。これを写真版によって収め、天の余白に『新編国歌大観』番号を付してある。解説は「一　下命者・撰者」「二　成立過程」「三　主要作者、論難書」「四　兼右本とその他の伝本、翻刻、注釈書」から成る。巻末には初句索引と作者索引が付されている。

先年『新編国歌大観』が完成して古典和歌の検索には便利になったが、古典和歌の正確な読解に際しては、活字翻刻に頼ることなく、元の写本や版本に立ち帰って本文を検討することが必要である。そして十三代集をはじめ個々の歌集の本文の大部分は今後の研究に委ねられている。その意味において、本叢書も広く活用されることが望まれる。

（平成七年九月一三日刊　菊判　八六四ページ　笠間書院）